

Title	中年期のキャリア・トランジションに関する一考察：IT人材のレジリエンスの観点から
Sub Title	
Author	渡辺, 俊典(Watanabe, Toshinori) 渡辺, 直登(Watanabe, Naotaka)
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2010
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2010年度経営学 第2605号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002010-2605

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

80931361

渡辺 俊典

主査

副査 1

副査 2

渡辺 直登

大林 厚臣

林 高樹

研究テーマ

中期のキャリア・トランジションに関する一考察
—IT 人材のレジリエンスの観点から—

内容の要旨

近年企業人は自己責任のキャリア・マネジメントが求められるが、新たな不安と葛藤を抱えるようになってきているという問題意識のもと、レジリエンス(回復力)の起因とキャリアの転機を乗り切る力との関連について考察を行っている。

中期の心理に関する研究は少ない。レジリエンスの研究も幼児期・青年期が中心であり、中期の企業人に関するものはほとんどない。レジリエンスの高い人間は問題解決意欲が高く、過去や他者に援助をもとめて変化に対処する。変化の早いIT業界で働く企業人の心理をレジリエンスの観点から分析することは有意義であると考え。そこで本研究の目的を「IT人材が中期の葛藤に上手に折り合いをつけて乗り切っていくためのレジリエンスの有効性を検証し提言を行うこと」とした。

研究方法は、個別に選択したIT人材37名へのインタビューによる定量分析を第一研究とし、第二研究として協力企業の従業員および個別に依頼したIT人材、企業人540名のアンケートデータを集め、階層的重回帰分析、共分散構造分析、多次元尺度法による分析、チョウ検定による分析を行った。

分析の結果、第一研究では上司承認、上司認知、展望の3軸でIT人材を類型化した。第二研究では中期は困難な状況から回復するとき人の支えの使い方に違いがあることがわかった。IT人材は職歴5,7,11,19年目において「レジリエンス」の構造変化があることがわかった。人材のタイプによって「レジリエンス」の発揮のされ方に違いがあることがわかった。

本研究の結論として、個人としての対応はできたことに着目してこれからどのように活かそうなのかを確認することである。企業としての対応は人材のタイプ別に適切な仕事を任せ成果のフィードバックを行い、過去、現在、未来を統合する方法を身につけて「成長感」、「時間的展望体験」を養うことが重要である。